

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720205

研究課題名(和文)「ひですの経」の言語的特徴によるイエズス会の言語規範の批判的再検討

研究課題名(英文) A critical reexamination on the linguistic standard of the Jesuit mission in Japan by the linguistic property of "Fides no Quio"

研究代表者

白井 純 (SHIRAI, Jun)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：20312324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：近年発見されたキリシタン版「ひですの経」は、規範性が強いとされるキリシタン版の一般的傾向に反する文献であるが、音韻、語彙、表記などの言語的特徴を検討した結果、「日本のカテキズモ」「講義要綱」「妙貞問答」などの同時代の日本イエズス会の日本語写本と同様の傾向が認められることを確認した。「ひですの経」は校正が不十分なため印刷物としての統一を欠くが、言語的特徴の特異性も写本段階の日本語の水準に対する印刷物としての校正の不足によるものとみれば不自然ではない。このことから本研究は、日本イエズス会の言語規範とされてきた特徴のうちに、出版段階での校正と調整に強く依存する要素があったと結論した。

研究成果の概要(英文)："Fides no Quio", Jesuit Mission Press in Japan, has not certain linguistic standard, it against general Jesuit Mission Press in Japan. I confirmed this book has the same property, which in the principal manuscripts of the Jesuit Mission in Japan, by the considering of phonetic, vocabulary, and writing. This book has not sufficient proofreading standard, therefore it generated peculiar linguistics standard. I conclude the linguistic standard of the Jesuit Mission in Japan, deeply depend on the printed books proofreading.

研究分野：日本語学

キーワード：キリシタン版 ひですの経 講義要綱 日本イエズス会 活字本 写本

1. 研究開始当初の背景

2009年にハーバード大学ホートン図書館(ボストン)で約一世紀ぶりに再発見された幻のキリシタン版「ひですの経」を原本調査したメンバーの一人として、日本語学の観点から同書の言語的特徴を明らかにすることを企画した。

2. 研究の目的

これまで、キリシタン版国字活字本(「ぎやどべかどる」「どちりなきりしたん」など)には共通した言語的な特徴があり、それが日本イエズス会の言語規範として広く認められてきたが、語彙、表記を中心として「ひですの経」にはこれに反する特徴が少なくないことは原本調査の段階で容易に指摘し得た。それと同時に、活字印刷物としても高い精度を誇るキリシタン版国字活字本と基本的に同一の活字を用いながらも、精度の低い木活字を無計画に増産・使用したとみられることは「太平記抜書」と共通するキリシタン版国字活字本末期の特徴のように思われた。一方で、版面の雰囲気はキリシタン版国字本の白眉とされる「ぎやどべかどる」と基本的に同一であり、純然たるイエズス会版であることは明らかである。

文献	刊行	特徴
さるばとる むんぢ 落葉集	1598	金属活字 イエズス会版
ぎやどべか どる	1599	金属活字 (一部木活字) イエズス会版
どちりなき りしたん	1600	金属活字 後藤版
朗詠雑筆	1600	金属活字 (一部木活字) 後藤版
ひですの経	1611	金属活字 (木活字増加) イエズス会版
太平記抜書	1612 か?	金属活字 (木活字増加) 出版元不明 版面異質

以上のことから、「ひですの経」においては活字印刷の段階で必要な校正が十分に行われず、そのことが木活字の使用のみならず言語規範からみた同書の特殊性の全体を形成したと考えられたため、研究の目的を「イエズス会の言語規範は活字印刷本の校正と出版によって構築される部分があった」ことの実証に向けた。従来、言語規範の確立した活字本に対してそれらを欠く写本、という単純な対立のもとで暗黙の前提とされていた部分について、活字本ながら写本的な特徴を

もつ「ひですの経」が新しい判断材料となることを期待したためである。

3. 研究の方法

イエズス会の言語規範は活字本を中心に考えられてきたが、本研究では「バレット写本」の他に、これまで言語資料としてあまり採り上げられることのなかった「日本のカテキズモ」「アニマの上に就て」「真実の教」「講義要綱」「妙貞問答」「バレット写本」などの写本を含めた調査を行うことにした。「日本のカテキズモ」は1581年に日本語に訳された教理書、「講義要綱」はイエズス会日本コレジヨで使われた教科書で写本しかないが、信徒の写本に比べて日本イエズス会の中心で作成され使用されたテキストであり信頼性が高い。「妙貞問答」は後に仏教徒となる不干八ビアン(カテキズモ)の著作とされる。「バレット写本」はエマニュエル・バレットによる「サントスの御作業」を中心とする写本である。

バレット写本を除く写本は複製本・注釈本こそ整備されてきたが、電子テキスト化はなされていない。そこで、複製本のスキャニングとOCR処理によって検索可能なテキストを作成した。そのうえで、「ひですの経」の語彙、表記を中心として写本、また従来から知られる活字本と比較するという方法をとった。

これらの比較により、従来は活字本に偏って考えられてきたイエズス会の言語規範について、イエズス会の日本語の一般的水準で写本に現れると期待される水準と、活字本の出版における校正によって補正された水準とを区別し、イエズス会の言語規範の多重性を明らかにできると考えた。

4. 研究成果

調査の結果、当初の予測通り、「ひですの経」には語彙、表記を中心として数多くの写本と共通する特徴が見出された。いわば「ひですの経」は「印刷された写本」というべき特徴を備えており、印刷本にとって不可欠な校正を経ているか、不十分であったため、活字本に必要な言語規範を備えるに至らなかったと考えられる。

文献	刊・写	言語的特徴
日本のカテ キズモ 講義要綱 妙貞問答 バレット写本	写本	写本的 【相対的に低い規範性】
ひですの経	活字本	写本的 【相対的に低い規範性】
ぎやどべか どる どちりなき りしたん他	活字本	活字本的 【相対的に高い規範性】

したがって、イエズス会の言語規範のあり

方は、「ひですの経」や写本にみられる水準を基本として、活字本においては校正を徹底することで必要な水準に達したことを示している。「ひですの経」は校正が徹底しなため、印刷本でありながら写本的な特徴をもつ出版物となったが、日本イエズス会にとって同書に現れた日本語は間違っただけではなかったであろう。

1. 語彙的側面

キリスト教の神を表す用語として、キリシタン版は「Deus(デウス)」(もしくは「御主」)を採用したが、それに至るまでには「天主」「天道」「尊主」など別の訳語が一部のローマ字活字本で使われた。「羅葡日辞書」の「デウス」の項目には対応する日本語として「天尊」「天帝」も挙がっている。

「日葡辞書」では、これらの用語の意味だけでなく、使われ方についても言及しているが、よく似た説明になっている。

用語	使われ方
天道	以前は、この語で我々はデウスを呼ぶのが普通であった。
天尊	教会内において、デウスすなわち天主の主の意味で通用している語。
天主	教会の書物用語。
尊主	教会の書物の中で、デウスについて言う以外には用いられない。

これらの用語は教会内では使われていたらしいが、同時に、本研究で調査した写本にもよく用いられていることを考慮しなければならない。

「尊主」は「バレット写本」「講義要綱」に僅かだが用いられ、このことは写本的な特徴の一つに数えられていたが、「ひですの経」にも「尊主」が用いられたこと、「日葡辞書」において「教会の書物の中でデウスについて言う」とされていることを勘案すれば、デウスを意味する用語「尊主」が、日本イエズス会内部では継続して使われており、活字本で統一が果たされた後もそれが変わることはなかった、とみるのが自然だろう。ここでいう「教会の書物」が活字本ではないことは明らかであり、写本のかたちで存在する書物を指すと考えて良いだろう。したがって、キリシタン版としては末期の出版物である「ひですの経」で「尊主」が使われたとしても、日本イエズス会で使われる神を表す用語の一つとして格別の違和感はないのである。

但しこれらの用語は校正が徹底しなかった初期の活字本には僅かに使われ、以後、活字本からは姿を消す。このことは言語規範の確立が出版における校正という行為によって維持されていたことを示すが、「ひですの経」は、この校正が不十分な状態を曝したものである。

2. 表記的側面

キリシタン版の和語の漢字表記は、「落葉集」の「小玉篇」の左傍訓(これを定訓という)に基づき、高度に統制されている。基本的に「小玉篇」の左傍訓にない漢字の和訓は認めないという表記統制は、当時の日本語を基盤としてはいるものの、それよりも強い漢字制限として機能した。

しかし「ひですの経」ではそうした漢字制限に綻びが見えている。

和語	ひですの経	定訓の表記
はるか	邈	遙
わたる	航	渡
なぞらふ	准	擬
すぶる	統	部
くばる	賦	配
ひく	惹	引
さく	割	裂
ならぶ	駢	双
ふす	俯	臥・伏

「ひですの経」で用いられた和語の表記には、上の表のように特殊な漢字表記がみえ、これは他の「ぎやどべかどる」など他のキリシタン版にはみられない。定訓の表記は「小玉篇」に見える定訓に対応した表記で、こちらが期待されるキリシタン版としての表記である。

但し「ひですの経」の漢字表記は日本語として誤っているわけではなく、本研究で参照したキリシタンの写本にも一部がみえている。おそらく、一般的な表記では問題のない水準なのだが、活字本では漢字辞書「落葉集」に基づく定訓とその表記の対応関係が重視されたために、漢字表記の統一が推進されたのだろう。この調整は、ヨーロッパにおいて単語のスペリングが植字工・文選工によって統一されていったように、活字印刷本の出版にあたっての調整である。これをイエズス会の言語規範と呼ぶのなら、彼らの日本語の実態を正しく反映したものではない。そこには出版という行為をとおして達成される部分も含まれていた(それ故、写本ではそれらが発揮されることはない)と考えるべきである。

「ひですの経」には、キリシタン版では決して漢字表記されなかった Anjα(天使)を「安如」と、Egypt(エジプト)を「恵実土」と当て字表記した例がある。また、「思安」「干要」といった略字表記(本来は「思案」「肝要」)も、写本であれば起こり得た表記だろう。これらは本研究が参照した「講義要綱」などのイエズス会の写本にはむしろ一般的な表記であって、イエズス会内部で流通していた表記だと思われる。

以上、語彙的、表記的の双方から、「ひですの経」の言語規範のあり方を検討した。その過程で、これまで言語規範としてみられていた特徴が、印刷上の方針に過ぎない(印刷

物としての体裁上、方針が必要なのでどちらかに統一しておくが、どちらを選択すべきかについて言語的な根拠はない)のではないかという疑念を強く生じることになった。この問題は「イエズス会の言語規範」という考え方にも強く再考を迫るものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

白井純「原田版「こんてむつすむん地」の版式について」『訓点語と訓点資料』135 輯、訓点語学会、2015、pp.L1-L17、査読有

〔学会発表〕(計 3 件)

白井純「「キリシタン版の印刷技法」東洋文庫東洋のコディコロジー「非漢字文献」—文理融合型東洋写本・版本学(講習会)—」、東京・東洋文庫、2013.10.18

白井純「キリシタン版の印刷技法と言語規範」北海道大学国語国文学会平成 25 年度大会、札幌・北海道大学、2013.7.13

白井純「新出キリシタン版『ひですの経』からみた『太平記抜書』の刊行について」第 107 回訓点語学会研究発表会、東京・東京大学、2012.10.21

〔図書〕(計 4 件)

福島金治編『学芸と文芸 生活と文化の歴史学シリーズ 9』竹林舎 (所収論文) 白井純「キリシタン版の刊行と日本語学習」、印刷中

末木文美士編『妙貞問答を読む ハビアン
の仏教批判』、p.487、宝蔵館、2015 (所収論文) 白井純「キリシタン文献の「傍流」 国
字本『ひですの経』からみた『妙貞問答』」、
pp.475-485

豊島正之編『キリシタンと出版』、p.370、
八木書店、2013 (所収論文) 白井純「キリ
シタン語学全般』、pp.199-223

韓美卿編『日本語学・日本語教育学 6 日
本語史』、p.351、J&C、2013、(所収論文)
白井純「キリシタン文献と日本語研究』、
pp.335-345

〔その他〕

『キリシタンと出版』紹介記事

http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/sirai_1/2013/10/6468.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白井 純 (SHIRAI, Jun)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：20312324